

常に初心に立ち返らせてくれる

「今日・ニコ・ワタシ」さえよければいいですか？
そんなことはありません。「今日・ニコ・ワタシ」を
満喫する人は、それを満喫できない人々のことを
考えなくては。想像力を持つ大切さとは――。

フォトジャーナリスト
安田菜津紀

●やすだ・なつき 1987年神奈川県に生まれる。NPO法人「Dialogue for People」副代表。世界各地で難民や貧困、災害をテーマに取材を続けている。著書に『君とまた、あの場所へ：シリア難民の明日』『写真で伝える仕事―世界の子どもたちと向き合って―』など。

月三百冊の絵本

――安田さんの本との出会いはどのようなものだったのでしょうか？
母が絵本の読み聞かせにものすごくこだわる人で、物どころがついた二、三歳の頃から小学校低学年ぐらゐまで、毎日読み聞かせをしてくれました。冊数は月三百冊。一日にす

ると十冊ですから、かなりの数だと
思います。
――すごい！
尋常じゃないです。一つの図書館の本では足りず、いくつも図書館を回って、ある図書館の本を読み尽くすと次の図書館へを繰り返していました。母が図書館カードを束にして持っていたのを覚えています。
母には、人を傷つける人間になっ

てほしくないという思いがあつて、共感する力や内面の深みを蓄積していくものは何だろうと考えたとき「絵本」となったようです。これだけ聞くと美しい話ですが、子どもですら一日十冊も読まれると眠くなる（笑）。眠さに負けそうになっていると、「こら、寝てるんじゃないぞ！」という感じで起こされて、眠気と闘いながら聞いていました。し

かし、あの読み聞かせの時間が、いろいろな人と向き合つて話を聞かせてもらおうときの感受性を培ってくれたと思います。私にとって欠かせない礎です。

――膨大な絵本と触れたことは、フォトジャーナリストとして紛争地や被災地の人々の姿を伝えるといった仕事にもつながっていますか？

仕事のきっかけとなったのは、高校生のときに「国境なき子どもたち」という国際協力NGOのプログラムに参加し、子どもリポーターとしてカンボジアを訪れて貧困の中にいる子どもたちを取材したことでした。現地での体験や自分が受けた衝撃を多くの人に伝えなければと強く思ったことが今の仕事につながっているのですが、原点はやっぱり母の読み聞かせだったと思います。

絵本の選択には、子どもに何を伝

えたいかが反映されていると思うんですね。選ぶ大人のスタンスはそれぞれですが、母は正義感の強い人でしたので、佐野洋子さんの『100万回生きたねこ』（講談社）のように「命とは」を広く問うものや、戦争をテーマにしたものも多かったんです。

たとえば『チロヌップのきつね』（金の星社）。名作と言われている絵本ですが、老夫婦とキツネの家族の物語を描いたもので、最初は平和な暮らしたった島に戦争が訪れ、人間も動物もそれに巻き込まれていく。この本が問うテーマのひとつに戦争があると思うのですが、どうしたら戦争はなくせるのかといったことは子どもだけでは消化しきれません。けれども絵本という媒体を通して、感じたことを分かち合い、大人も一緒にそのことを考えられるんです。

母は「世界には悲しいことや理不尽なことがたくさんあつて、さまざまに苦しむ人たちがいる。どうしたらいいんだろう」ということを一緒に考えようね」と、絵本を通して投げかけてくれたのだと思いますし、その投げかけは間違いなく現在の仕事にもつながっていると思います。

お勧めの三冊

――とくに印象に残っている絵本をあげていただくとしたら？

やはり『100万回生きたねこ』ですね。母は普段はやさしいのですが怒ると怖かったので、私は「この本はイヤだ」「読みたくない」はあまり言わなかったのですけれど、これだけは悲しくて悲しくて、初めて読んでもらったときに「何でこの本を借りてきたの！ お願だからも